

特別展 橋本コレクション

中国の絵画

—明・清・近代—

渋谷区立松濤美術館

会 期

昭和59年 4月10日(火)

↳

昭和59年 5月27日(日)

第一会場

地下一階主陳列室

第二会場

二階特別陳列室



邊文進「柏鷹図」



文徵明「秋光泉声図」

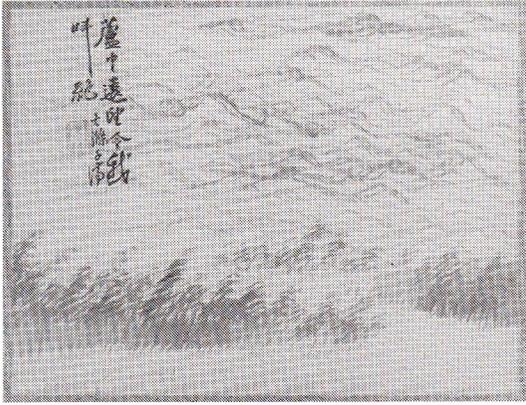
概 説

明初の漢民族文化復興政策のもと、元代に廃されていた画院が再興され、永楽中の邊文進、宣徳中の石鋭、成化から正徳にかけて呉偉・王誥らが活躍します。その画風は、山水は南宋画院の馬遠・夏珪を、花鳥は北宋画院の黄子体及び南宋画院の院体の影響を強くうけています。

宣徳中の画院画家戴進は、その出身地である南宋の故都杭州に伝わる南宋院体を基調に元代の李郭派を学び、水墨をもって雄渾な湖山を描きましたが、その筆墨法には、粗放狂逸ともいえる一面があり、それが呉偉・張路らにうけつがれ、後代浙派と称される職業画家のスクールが生まれます。浙派の画家としては、張路・鄭顛仙・宋登春・汪

肇が在野で、呉偉・王誥などが画院で活躍しますが、その末流になると、職業画家の技術としての筆墨法のみが強調されて、表現内容と乖離し、呉派系文人画家達から「狂態邪学」の批判を受け、明代中葉より衰えを見せ、同時に、浙派より人材の供給を仰いでいた画院も衰退していきます。

これに代って登場するのが、呉派文人画です。文人画は元末四大家により確立され、明初の蘇州の文人にうけつがれながら、浙派の隆盛に押されて低調でした。これが、蘇州の経済的文化的繁栄を背景に、成化年間に沈周がで、その門から文徵明がでて呉派文人画として方向づけられます。文徵明は、同時に活躍した仇英・唐寅ら院派の職業



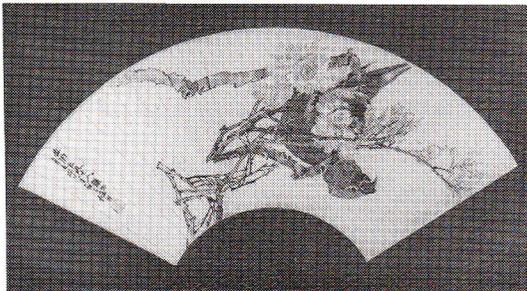
石濤「杜甫詩意圖」のうち



陸鳴「南渚春晚圖」



金農「梅圖」



任伯年「花鳥扇面」

画家とも交わって技法を学び、その門からは陳淳・居節などがでて隆盛を見ますが、万暦以後、師風を継承するだけで次第に形骸化します。ここに董其昌がでて、南宗正統論を唱導し、文人士大夫の教養と精神の表現手段としての文人画の理論が確立され、清初の四王呉恽にうけつがれて清朝一代の絵画の正系となります。

また、文化的爛熟期を迎えた明末、その政治的混乱を反映するかの如き、尚古趣味やデフォルメをもって描かれたいわゆるエキセントリック絵画が呉彬・米万鍾・丁雲鵬らによって描かれ、清初には、清朝の異民族支配に服するを潔しとしない八大山人・石濤・傅山らの遺民画家が自由かつ個性的な絵画をもって抵抗の姿勢を示します。

一方、明末清初の都市経済の発展を背景に、江南の松江では顧大申・陸鳴など、金陵では龔賢らの金陵八家、揚州では袁派の袁江など、杭州では藍瑛・章谷など、新安では姚宋・祝昌などがでて、それぞれの都市に独特の画風が発達し、都市住民に受納されます。

乾隆年間、揚州は両淮塩の集散地として繁栄の頂点を迎え、塩商達は、豪荘な邸宅を営み、文雅の会を催し、文人藝術家達を援助します。ここに流寓した金農・鄭燮ら八人の画家を揚州八怪と称します。彼等は、余技としての絵画・自娛の為の絵画という文人画本来の原点に帰り、伝統形式の踏襲にとどまっていた清朝文人画に新たな活力をそそぎこみます。

またこの時期には、日本の長崎派の基をひらいた沈南蘋はじめ多くの画人が日本に来遊しました。

嘉慶・道光中は、絵画全般に低調で、銭杜・潘思牧などが僅かに光彩を放つのみでした。

近代の幕開け阿片戦争を経て、経済の中心が上海へ移ると、絵画の中心も上海に移り、呉昌碩・任伯年らが活躍します。民国になり、徐悲鴻らの留学生が西洋画技法と中国絵画とを合して国画という様式を完成させるに至ります。

橋本コレクションの中国絵画は、橋本末吉氏が、鑑賞者・研究者としての卓越した見識をもって蒐集されたもので内外に高い評価を得ております。本展では、明末清初の絵画を中心に、橋本コレクションの中より、140余点を選び陳列しております。

特別陳列

渋谷区在住作家の作品

サロンミューゼ (2階) 出品目録/作家略歴(50音順)

飯田満佐子「花筵」1977年 彩墨 F20号
大正8年(1919)東京に生まれる
昭和29年(1954)大東文化大学中国文学科卒

伊藤隆康「トゲの箱」1967年 アルミニウム 高さ66cm
昭和8年(1933)兵庫県明石市に生まれる
昭和33年(1958)東京芸術大学絵画科卒

大森啓助「パンジー」1979年 油彩 F30号
明治31年(1898)兵庫県神戸市に生まれる
大正9年(1920)関西学院高等部卒 川端画学校で学ぶ

ガストン・プッチ「赤富士Ⅱ」1982年 リトグラフ76.0cm×39.5cm
昭和5年(1930)カナダ・ケベックに生まれる
カナダ・ドミニカンハウスオブスタディーズで哲学神学を学ぶ

清原啓一「マジョリカのポピー」1982年 油彩 変形25号
昭和2年(1927)富山県砺波市に生まれる
昭和27年(1952)明治大学卒

児玉幸雄「広場の朝市」1982年 油彩 P12号
大正5年(1916)大阪市に生まれる
昭和14年(1939)関西学院大学卒

五味秀夫「大通り」1972年 油彩 F30号
大正11年(1922)東京に生まれる
昭和21年(1946)東京美術学校卒

助川武史「笛を吹く少女」1981年 石膏着色 高さ
昭和15年(1940)茨城県に生まれる
富永直樹に師事

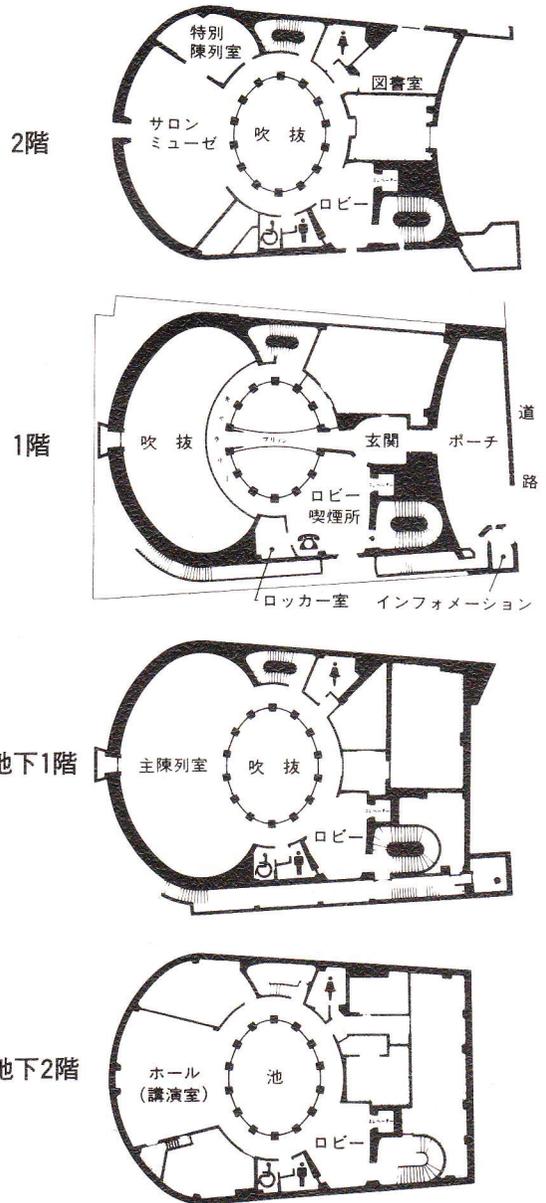
辻 朗「残雪の山」1965年 油彩 F50号
大正8年(1919)東京に生まれる
昭和20年(1945)東京美術学校油絵科卒

西嶋俊親「水温む」1983年 油彩 F15号
昭和3年(1928)東京に生まれる
昭和25年(1950)東京美術学校油画科卒

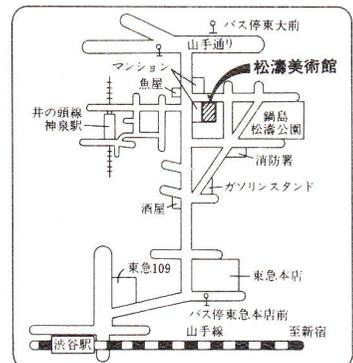
村田勝四郎「トルソ」1943年 ブロンズ 高さ84cm
明治34年(1901)大阪市に生まれる
大正14年(1925)東京美術学校彫刻科卒

脇田愛二郎「SORROW」1974年 黒御影石 高さ31cm
昭和17年(1942)東京に生まれる
昭和39年(1964)武蔵野美術大学卒

松濤美術館・平面図



案内図



◎会 期 昭和59年4月10日(火)~昭和59年5月27日(日)

※会期中陳列替をいたします。

◎休 館 日 4/16(月)・4/23(月)・4/30(月)・5/1(火)・5/4(金)・5/7(月)・
5/8(火)・5/13(日)・5/21(月)

◎開館時間 午前9時~午後5時(ただし、入館は4時30分)

◎入 館 料

	個人	団体(20人以上)
一般	200円	160円
小中学生	100円	80円